

『おねーさんの耳はロボの耳』 完結編第四話

著作・a s h

この作品は『To Heart』（リーフ・ビジュアルノベルシリーズVOL.3）を元としています。

12. 誘拐？

セリオが来栖川老人の車で屋敷に向かってた頃、一方の浩之はと言うと、

「セリオお、早く帰ってこいいい。腹減ったじゃないかあ」

と叫びながらあちこちを探し回っていた。

「セリオおねーさんも心配ですけど、浩之さんも何か食べた方がいいんじゃないですか？ わたしが何か作りますから…」

一緒にいるマルチが心配そうな表情で言うのだが、浩之之にしてみれば特別に腹が減っているからセリオを探し回っているわけでもない。一つのいいわけに過ぎないのだが、マルチは正直に言葉通りに受け止めてくれたらしい。

もちろんマルチだって、セリオのことを心配しているのは浩之の目から見ても痛いほどに分かる。

「…ありがとうな、マルチ。でも、心底から腹が減って動けないってわけじゃないし、今はセリオの方が大事だからさ」

「はい、それは分かりますけど…。何の手がかりもない状態で探し回っても、浩之さんの

方が疲れるばかりですよ…。おねーさんのことは心配ですけど、浩之さんまでどうにか なったちゃったら、わたしどうすれば…。」

語尾の方がわずかに涙声になっている。そんなマルチを見て、浩之は少し落ち着きを取り戻していた。と同時に、マルチにもこんな一面があったのだなと感じていた。

こんな場面で立場が逆だったらどうだろうか。いなくなったのがセリオではなく、マルチだったら。

恐らくセリオならお手前の衛星リンクや各種高性能センサーを駆使して、瞬時にマルチの居所を割り出して、「後はわたし一人で連れてくるから、浩之さんは先に帰って、ゆっくりしてちょーだい。あの子も浩之さんに余計な気遣いをさせてしまったことを気にするでしようから…ね」なんて言うだろう。

だが、現実にはいなくなったのはセリオなのだ。マルチにはセリオのような高性能センサーはない上に、感覚機能も人間並みだ。ただ、視覚だけはCCDの特性から人間よりも夜目がきく。それを頼みにしてはしていたのだが、確かにあてもなく探し回ったところでセリオが見つかるとも思えない。

しかし、セリオからの連絡がないと言うことは、セリオが何らかの事情で連絡を出来ない状態にあるはずだ。一切の連絡が不可能となる状態となると浩之にとって考えたくない状況ばかりが思い浮かんでしまうのだ。

「…そうだな。確かにマルチの言う通りだよ。あてもなく探したところで、セリオが見つかるくらいなら、セリオから連絡があっても不思議はないだろうさ。でもな…。」

浩之はそれ以上を言えなかった。もしも、セリオがどこかで動けない状態だったら…、

『おねーさんの耳はロボの耳』完結編第四話

あの曲がり角の先にセリオがいたら…。そんな風に考え始めると、到底簡単に切り上げることは出来そうにない。

そんな思いで、通りの先を見つめていると、マルチが突然喋り出した。

「浩之さん！ やつぱり一度家に戻りましょう！」

声の調子は元気なマルチそのもので、さっきまでのしんみりとした雰囲気打ち壊すかのように、さらに続ける。

「とにかく腹ごしらえをして、それからおねーさんのことは考えましょう。

だって、お腹が空いてたらいい考えも何も浮かばないし、いざって時に何も出来ないんじゃない？ それこそおねーさんに笑われますよ」

「マルチ…」

「それにもかししたら、山本さんなら何か知ってるかも知れないじゃないですか。ね？」

一度家に戻って、ご飯を食べて、山本さんに聞いてみて、それからもう一度探してみよう」

それが単なる強がりなのは、いくら鈍い浩之と言えどもすぐに分かった。そもそもマルチはうそがつかない。悲しいくらいにばか正直なのだ。

浩之は小刻みに震えるマルチの肩にそつと手を置いて、優しい声で一言返す。

「ああ、そうだな…」

浩之自身も不安を拭い去ることは出来なかったが、マルチが気丈に振舞おうとしているのに、いつまでもそんなことを言っつてられない。意を決して浩之はマルチとともに家へと足を向けた。

(…まさか誘拐なんてことはないよな？ あのとセリオが何もせずにさらわれるわけではないな…)

臂力りよりくに秀でた人物でも危険にさらされることはある。要はその時の状況で決まるので、セリオがいかに優秀でも必ず回避できるとは限らないのだが、その時の浩之にはそんなことまで考える余裕はなかった。ましてそれが、あながちはずれでもなかったことなど、知る由もない。

その後、浩之は家に戻るとすぐに電話機に目をやった。だが、それが鳴りはしない。留守番機能もない電話機なので、自分たちが外に出てる間に連絡があったとしても分からない。

浩之がうらめしそうに電話機を眺めていると、マルチがそれに気づいて、

「電話、鳴りませぬね…」

とつぶやいた。だが、浩之の気持ちを察してか、マルチはそれ以上を言わずに、浩之が動き出すのを待っていた。

そんなマルチの気持ちを汲み取ったのか、しばらくして浩之は電話から視線をずらし、「…と、ここで電話をじっと見ても、何も始まりはしないか…」

と言った後、笑いながらマルチに続けて言う。

「それじゃ、マルチのお手並み拝見と行こうかな？」

「はいっ！ 任せてください！」

浩之の言葉に間髪入れずにマルチが明るく答え、二人は電話機のある玄関からようやく中に入り、台所へと向かった。

台所へ行ったものの、二人には切実な問題があった。と言うのは、めぼしい材料がないのである。

そもそもセリオと浩之が買い物に出たのは、その夕食の材料を買ったためであり、そのまませリオがいなくなってしまうのだから、まともな夕食など期待できるはずがないのだ。

「まあ、手早く出来るものでいいぜ」

と浩之が言うのと、マルチは困った顔になり答える。

「ええ、そうするのはいいんですけど、ご飯だけはあるんです」

「ご飯だけ？」

「ええ。セリオおねーさんが出掛ける前に炊飯器をセットしておいてくれたんです」

「そうか……。それじゃ、おかずだけか……」

「そうなんですけど……その材料が……」

このところ、藤田家の食事の支度は完全にセリオが仕切っていて、マルチはセリオの指示に従って料理の手伝いをしていただけだった。そのおかげで、マルチは独自の献立を作ると言うことがほとんどないのだ。

「困ったな……。ま、何とかある物で工夫してくれよ。マルチが支度してる間に俺は一度山本さんに連絡してみるからさ」

「はい、分かりました……」

先ほどと違って、まるで自信のない返事を返すマルチのことが気になったものの、ひとまず山本への電話を優先させることにした浩之は、マルチに背を向けて再び電話機のところに戻る。

「さて、と……。山本さん、何て言うかな……。いやいや、何て説明すればいいんだ？ セリオが誘拐された？ でも、まだ誘拐と決まったわけじゃないからとりあえずは、セリオがいなくなったって言えばいいの？」

電話機を前にして、ことの顛末を山本にどう説明するかで少しの間だけ悩んでいたが、「ええーい、とにかくここでそんなことで悩んでもしよーがねえ」

と意を決して、いつもの電話番号を回す。

何回かの呼び出し音の後に、聞きなれた山本の声を受話器越しに浩之の耳に届いた。

『はい、HM研究所です』

「あ、山本さん……」

『どうしました？ こんな時間に掛けてくると言うことは、何かトラブルでもありましたか？』

「セリオがいなくなっちゃったんですよ！」

結局あいさつも何もなく、いきなりの本題だった。

『え？ いなくなった？』

「はい、そうです！ 買い物に出て、ちょっと目を離れた隙に……」

だが、山本の反応は予想に反したものだっただけ。

『そんな……小さな子どもじゃないんですから、それでいなくなるってのはあまり考えられないですね……』

「でも、ホントになくなっただですよ！」

山本の冷静な反応に少しの苛立ちを感じて、浩之の口調に怒りの色が微妙に含まれる。

『…ホントですか？』

「ホントですって！ こんなこと冗談じゃ言えませんよ」

なおも信じようとしないう山本の言葉を受けて、浩之の口調がきつくなった。すると、山本もようやく事態を理解したらしかった。

『…分かりました。それじゃ私も一度そちらへ伺いますので、詳しいことはそれから聞きましよう。こつちもちよつと気になることがありますから』

「気になること？」

『とにかく後で話しますから。それじゃ失礼します』

急いでるようではあったが、山本の言葉には焦りは感じられない。そう言えばトラブルの時の対応も山本は冷静だった。そんな山本の態度に触発されたのか、受話器を戻した浩之はどことなく安心感を感じていた。何よりも自分以上にマルチとセリオのことを真剣に考えてくれている人なのだから…と。

浩之が電話を切つてから、しばらく時間がたった。

台所のマルチも気になるところだったが、浩之はずつと玄関にいた。電話機のそばから離れずに、山本の来るのを待っていた。もちろんそれはセリオからの連絡があるかも知れないと言っ一縷の望みを捨て切れないせいもある。

やがて、車の止まる音とともに、玄関に人の来る気配。

「こんばんわ、藤田さん」

やってきたのは山本だった。何やらアタッシユケースのようなものを持っている。

「山本さん、すみません。それで、詳しい話なんですけど…」

と挨拶もそこそこ、浩之が話し始めようとすると、すぐにそれを山本が制止する。

「いえ、今はとりあえずセリオの状態を確認することが先決ですから、それは作業をしなから聞かせてもらいますよ。えーっと、セリオの制御端末は二階ですよね」

と言いつつ、さっさと玄関を上がって、そのまま浩之の横をすり抜けて階段へと向かう。

その勢いに負けて、浩之がきよんとしてみると、山本は浩之を急かすように「藤田さん、何してるんです」

と階段を駆け上がりながら、声を掛けた。

「あ、はいはい……」

浩之は生返事を返しながら、山本の後について二階に向かった。その胸の内では、今さらながら山本のひとつとなりをよく知らなかったのだと痛感しながら。

(山本さんって、こんな強引な人だっけ?? もっとのんびり屋かと思ってたのにな……。
ホントに人は見かけによらないな)

呆れ顔のまま浩之が二階のセリオの部屋に入ると、山本はすでに持ってきたケースを開いて作業を始めていた。

(す、素早い……)

ケースからケーブルを出して、それをセリオの制御端末に繋げて、なにやら軽快にキーを打ち始める。どうやらアタッシユケースの中には携帯用のPCが入っているらしく、それを操作してようだった。

(俺が二階に上がるまでの間に、ここまでやってたのか? 山本さんって、実は凄い人な

んじゃないか?)

浩之が部屋の入り口で呆けていると、山本はキーを打ちながら尋ねてきた。

「それで、セリオがいなくなった時の状況はどんなものですか？」

「あ？ あ、ああ…。それは、本当に突然いなくなったんですよ」

「突然？ 争った形跡も何もなく？」

怪訝そうな表情を作る山本だったが、それでも顔の向きも手の動きも変わらない。

「ええ、…でも、セリオがもし無理矢理連れ去られようとしても、セリオは抵抗するんですか？」

「そりゃ、しますよ」

「え、そうなんですか？ てっきり、人間に危害を加える行動は出来ないのかと思ってたんだけど…」

浩之がそう言うと、山本はふと手を止めた。何やら複雑な面持ちで、浩之の方を向いて、ゆっくりと答える。

「…あまり知られていないんですけど、メイドロボットには最低限の倫理機構があるだけで、実際に人に危害を加える加えないと言う制限はないんですよ」

「え？ いわゆるロボット三原則って言うのは？」

「そんなもの組み込まれてませんよ、少なくともセリオとマルチにはね」

「それじゃ…」

「ええ、セリオは嫌なことには抵抗もします。相手が人間であってもね」

「そうすると、今回は？」

と、浩之が質問を返したところで、山本はまた向きを自分のアタッシュケースの方に直して、

「それはこれから調べますよ」

と答えた。

「これから？ どうやって？」

「セリオは衛星リンクの中継局との通信を常時行ってるんです。それで、その時に位置情報や自分の状態なども一緒に通知して、それはここに蓄積されてるんですよ」

「それじゃ……」

「ええ、それを追っていけば、どこにいるのかも分かるし、それが消えたとしても、そこまでの足取りがつかめるんですよ。まあ、病院や航空機内に入るとそれもしなくなるので、完璧とは言えませんが」

山本の説明を聞くと同時に、浩之の顔に笑みが浮かんでくる。と同時に山本に詰め寄って、やや興奮げみに言う。

「そ、それじゃ、すぐに調べてくださいよ！」

「今見てますから、もうちょっと待ってください」

そんな浩之を抑えながら、山本はまたも冷静に答えて、キーを打ち続けている。そして、携帯端末の画面を見ながら、何やら考え込むようにしては、またキーを打つと言う動作が何回か繰り返された。

「……まだですか？」

しびれを切らして浩之が控え目に尋ねたが、山本の返事はない。ただ黙々とキーを叩い

ては画面を見て、の繰り返しだった。

やがて山本の表情に変化が見え始めた。これまでは特に慌てた様子もなかったのに、段々深刻そうな表情になっていったのだ。

「……山本さん？」

心配そうに浩之が声を掛けると、山本はようやく返事をした。ただし、それは返事と言うよりもつづやきに近いものだった。

「そうか…やっぱりあのご老人が出てきていたか……」

「ご老人？」

怪訝そうに尋ねる浩之の声も届いてるのかいないのか、山本は独り言のように続ける。

「すると、これは思ったよりも事態は深刻かな……」

そんな山本の言葉に動揺を隠せない浩之だったが、事態がさっぱり飲み込めない。どうやら、自分の預かり知らぬところで、何かが動いているような気がすると言う程度だった。

「山本さん！ 一体何がどうしたってんです？」

たまらなくなつて浩之が声を上げると、ようやく山本がそれに反応した。

「あ、ああ、藤田さん…。セリオの居場所が分かりましたよ」

「それならすぐに行きましようよ」

「駄目…かも知れません……」

「どうしてですかっ！」

「セリオの現在位置は……ある人物の邸宅なんですよ」

「それがどうしたって言うんです？」

「…実はセリオのテストには、この人物が絡んでましてね…」

と山本はその後、セリオの改造の背景とすでに回収指示が出されていることを浩之に説明した。その上で、今回セリオを連れていったのが、当の人物であることと、それが来栖川老人であることも告げた。

「…それが何だっけ言うんです？」

「藤田さん…」

「…俺に預けて、自分が欲しくなったからよこせて？ 何だよ、それ！ セリオは物じゃないんだ！」

法律上ではメイドロボは単なる「物品」でしかない。損傷させれば「器物損壊」に当たるし、勝手に連れ出しても「誘拐」でなく「窃盗」に当たる。浩之の反発は山本も予想していたが、今の状況では何を言っても浩之が収まることはないだろう。そう判断して山本が黙っていると、浩之が声の調子を落としてつぶやくように言う。

「…セリオの気持ちはどうなんだ……」

その言葉にわずかに山本が身じろぎしたが、やはり何も言わなかった。山本にはセリオが回収を拒むとは思えなかった。セリオの本心は浩之やマルチと一緒にいたいに決まっているのも承知していたが、そんなことはおくびにも出さないだろう。

重い沈黙が二人を包んでいた。そして、それを破ったのは、電話のベルだった。

「！」

真っ先にそれに反応したのは、浩之だった。その行動も素早く、二回目の呼び出し音が鳴るよりも早く階段へと向かっていた。そして、三回目の呼び出し音が途切れるよりも先

に受話器を取った。

「は、はい、藤田ですっ」

『は、はい、浩之さん？ どうしたの？』

その声は間違いない、セリオのものだった。そして、その喋り方も。

「な、セ、セ……」

『どうしちゃったの？』

「ど、どーしたもこーしたもあるかよ！」

『心配掛けちゃったかしら？』

「当たり前だろ！」

『ごめんなさいね。でも、わたしの位置情報はちゃんと送信してたから、すぐに分かったでしょ？』

「バカヤロー！ お前のそんな機能なんて、俺が知るわけじゃないか」

『あら……そーだったかしら？』

「ホントに心配したんだぞお……」

『ごめんなさい。でも、もう安心した？』

「ああ……。でも、お前……今……米栖川の……」

『ええ、そうよ。で、あと一時間くらいしたら帰るから、心配しないでね』

「帰る？ だって、回収指示とか……」

『いきなり連れて来られて、そのままってことはないでしょ？ それにおじい様も浩之さんと話してみたいと言ってるし』

「おじい様？」

『ええ、とにかくそーゆーわけだから、心配しないでね』

「本当に帰ってくるんだな？」

『ええ、本当よ』

「約束だぞ」

『いいわよ。ちゃーんと帰って今夜は添い寝でも何でもしてあげるわよ』

「バ、バカヤロー！」

『あはは、照れることないでしょ？ それじゃーねー』

それまでの重たい雰囲気は何もかも吹き飛ばしてしまうかごとく、セリオの明るい声を最後に電話が切れたが、浩之はしばらくそのまま動かなかった。

「……………」

そこに、いつのまにか浩之のそばに来ていた山本が尋ねる。

「藤田さん？ どうしたんですか？ セリオだったんじゃないですか、今の」

が、浩之の反応は何もない。受話器を持ったままの姿勢で、固まっていた。

「藤田さん！」

山本が少し声を上げると、ようやく浩之は受話器を戻して、ぼつりともらし始めた。

「……………」何だっつんだよ……………」

だが、それはどうやら山本に答えてるのではないようだった。

「……………」俺の心配は？ 気遣いは？ さっきまでの緊張感は？ 何が『それじゃーねー』だあ？ 一体何を心配してたんだ、俺はあ……………」

「あのう、藤田さん？」

「……あれだけ探し回ったのは何だったんだ？ 何で山本さんにも来てもらったんだよお？」

山本の言葉に何も反応せずに、ただ自問を繰り返す浩之。いや、正確にはそれは自問ではないのだけれうが、山本に対して言ってるのでもない。

「藤田さん……」

そんな浩之の心中を察して、一度だけ名前を呼んで山本が苦笑する。するとふいに浩之が大きく手を広げるようにして、

「一体、何だったんだよお……」

とつぶやいた後、さらに続けて一際大きな声で叫んだ。

「セリオオオオオオオ！」

無論その叫びが、当のセリオの耳に入るはずがない。いくらセリオの聴覚が優れているとしても。しかし、その同じ頃の来栖川邸では、こんな会話がされていた。

「今ごろ浩之さんは『セリオオオオオオオオ！』って叫んでるんじゃないかしらねえ？」

「ほお、どうしてそう思うんじや？」

「だって、凄く心配してたもの」

「そりゃ悪いことをしたようじやな」

「ええ、そうね。だから、今日はあと一時間のうちに絶対に帰るわよ」

「分かった分かった。それじゃまずはお前さんの料理を頂くとしようかな」

「はいはい」

自分の行動がすっかりセリオに見透かされることに気づく余裕もないまま浩之は叫び回っていた…。

「ちくしょおお、セリオの奴ううう……」

そこに叫び声を聞きつけて、エブロン姿のマルチがやってきた。

「あのー、どうしたんですか？ ……あ、山本さん、こんばんわー」

事態がさっぱり飲み込めていないマルチがのんきに挨拶をすると、浩之はそれが一層気に障ったらしく、それまでよりも暴れ出した。

「だあああ！ マルチい、そんなのんきな挨拶してる場合じゃないんだあ！」

「え、そ、そうなんですか？」

浩之の態度ににわかには表情を曇らせるマルチだったが、そこに山本が冷静にフォローを入れる。

「いや、マルチ、気にすることはないよ。セリオから無事だって電話があってそれまでの緊張が一気に解けて、藤田さん自身どうしていいか分からなくなってるだけだから」

するとマルチの表情もすぐに笑顔にと変わっていく。

「え！ おねーさんから連絡あったんですか！ よかったですー」

「うん、それはいいんだけど…」

と苦笑しながら山本が浩之を一瞥する。が、その様子は一向に変わらない。

「困ったですねー」

全然実感のこもらない口調でマルチも山本に続いたが、やはり何も変わらない。

「まあ、そのうち落ち着くだろうから、しばらく放っておくでしょう」

「いいんでしょうか？」

と、エプロンの裾を両手で掴んで、心配そうな表情を見せるマルチ。ちなみにエプロンの下にはちゃんと着衣があるので、妙な妄想は無用だ。

「下手に手を出すと、余計に暴れるかも知れないからね。ところでマルチ、そのエプロンは？」

一人で叫び回る浩之とは完全に別世界を築いた山本が、かたわらのマルチに問い掛けると、マルチは少し恥ずかしそうに、そして嬉しそうにしながらも、にこやかに答える。

「あ、これですか？ 浩之さんが買ってくれたんですー」

「いや、その素性を聞いてるんじゃないかって、エプロン着けてる理由を……」

さも幸せそうなマルチに微笑みを返しながら、山本が聞き直す。ちなみにあえて記述してはいないが、こうした二人のやり取りの最中も浩之は叫び回っていたりする。

「ああ、晩ご飯の支度をしていたところなんです」

「マルチが？ って、そうか、セリオは出てるから……」

「はい、材料もなかったのであまり大した物は出来なかったですけど……。そうだ、山本さんも一緒に食って行きませんか？」

「いいのかい？」

「ええ、それくらいの量はありますから」

「へえ……。それじゃごちそうになろうかな？」

「はい！ ……と、浩之さんはどうでしょうか？」

元気に答えた後、マルチは思い出したように周りで叫び回っている浩之の方を見て、

困ったような笑みを浮かべた。

「そうだなあ、いくら放っておいても戻りそうにないし、マルチが呼んだら戻る…なんて冗談みたいなことあるわけないか」

と山本は冗談めいたことを言ったつもりだったが、マルチはそれを真剣に受け取ったらしく、

「そうですか。それじゃ…」

とまじめな表情で答えた後、山本の横からすつと浩之の方に近づいた。

「おい、マルチ?」

困惑した表情の山本に構わず、マルチは真剣そのものと言った様子で、浩之の手を掴んだ後、浩之の叫び声に負けないくらい大きな声を出した。

「浩之さんっ、ご飯ですよ!」

すると、浩之の動きがピタリと止まったかと思うと、クルリと顔だけをマルチの方向に向けて、浩之はそれに答えたのだ。

「お、おお! マルチ、やっとメシ出来たのかあ!」

「ウソ…」

あ然とする山本の口からは、そんな言葉がもれていた。だが、マルチも浩之もそれを気にする風もない。

「さて、セリオも帰ってくるってことだし、まずは腹ごしらえをしとくか」

「はい。あ、浩之さん。今夜は山本さんも一緒にどうぞって誘ったんです」

「おお、そりゃいいや! さ、山本さん行きましようか!」

「は……はあ……」

明るい二人に生返事だけを返し、そのまま浩之に引つ張られる形で台所の方へと連れて行かれる山本。

「それじゃ、すぐに盛りますから」

明るいマルチの声の後、不意に浩之の動きが止まった。そして、それと同時に山本の動きも。

「……マルチ？」

テーブルの上に並べられた夕食を見て、浩之と山本がほぼ同時に絞り出すようにつぶやいた。

「はい、何でしょうか？」

ちよつと小首をかしげながら、マルチが答える。その時の服装も相まってかそれはそれは可愛い仕種で、普段の浩之ならそれで絶叫してるところだろう。

だが、その時は違った。

浩之も山本もテーブルの上に、ちよこんと置かれた茶碗を凝視して、微動だにしない。

「……これが晩ご飯？」

浩之がつぶやく。

「はい。そうです」

マルチが答える。

「……でも、これってどう見ても……」

と山本が言葉切る。そして、その後が続く言葉を浩之が口にする。

「ネコまんま？」

ネコメシとかネコまんまとか、色々言い方はあるかも知れないが、要するにご飯の上に鰹節がふりかけられているだけのものなのだ。

「…いけないですか？ これじゃあ…」

二人の反応の悪さによく気づいたのか、マルチは心配そうな表情を作りそう尋ねた。今にも泣き出しそうな雰囲気もあり、これではどう見ても浩之たちの方がマルチをいじめてるような感じだった。

「い、いや、そんなわけでは…」

と浩之が慌てて否定するが、それ以上の言葉は出てこない。人間、本能に関することに、どうしても正直になってしまいうらしい。

だが、山本には浩之よりも余裕があったらしく、別の切り口でマルチに返し始める。

「マルチはこれをどこで覚えたんだい？」

「実はお隣の猫さんに聞いたんです。ご飯にうまい鰹節があれば、最高だねって」

マルチの答えを聞くと同時に、浩之は怪訝そうな表情を作った。だが、もう一人の反応はそれとは違っていた。

「猫に聞いたあ？ そんなことがあるわけな…」

「何て凄いな！ いや、マルチがそこまで成長してるとは！」

「い？ ……山本さん？」

浩之が山本の方を見ると、その両目はまさにらんらんと輝いてる、そんな表現が当てはまりそうなほどに感激してようだった。

「いやあ、犬の表情を読み取る訓練はしてたのに、猫までモノにするとはね！ さすが成長型だね！」

「そ、そんなに凄いですかあ？」

照れくさそうにするマルチに、山本はさらに言う。

「ああ、最高だね！ やっぱ俺が作っただけのことはある！」

「わたしって最高なんですかあ？」

要するに結局はそれが言いたかったのに違う……と、浩之が気づいた時にはマルチもすっかり乗せられているようだった。根が素直な性格なのだから、周りの雰囲気に乗せられやすいのだ。

「やれやれ……」

嬉しそうにはしゃぐ山本とマルチを見つめながら、ため息混じりにそれだけ言うと、そのまま椅子にどかっと腰を落とした。

一人だけ仲間はずれにされたせいもあって、浩之は冷静に二人を見つめることが出来た。（山本さんもこんな人だったとはな……。いやいや、本当に人は見かけによらないもんだな……）

などとあれこれ考えながら、はしゃぐ二人をじっと見つめるだけだった。

なお、当のネコまんまの味だが、使われている鰹節は以前にも登場した「普通のは違う本物の鰹節」である上に、ご飯はセリオがあらかじめセットしておいたと言うことから、その香りは芳醇にして味は絶妙であることをご想像いただきたい。

「…結局マルチは何もしてないのか？」

「鰹節を削ってたんです」

「…なるほど……。ま、結構うまかったからいいけどさ……」

と、これはその後のマルチと浩之の会話である。さて、場面を来栖川老人とセリオの方に移すでしょう。

たった一人が使うには豪華すぎる食堂で、その場には全然合わないセリオの作ったごく普通のなべ物を、これ以上もないほどにおいしそうに食べる来栖川老人。

一緒に料理を食べることはないが、それでもずっとセリオは来栖川老人のそばにいた。

来栖川老人の食べる様を見ては、

「子どもみたいね」

「年を取ると、子どもに帰るんじやよ」

「たちの悪いお子様だこと」

などとすっかりいつもの調子で歓談しているのだった。やがて、来栖川老人の箸が止まる時間が長くなった頃合いに、不意に来栖川老人が話を切り上げてまじめな表情で切り出した。

「さて、いつまでもお前さんとこうしてたいのは山々じゃが、約束は守らんといかんからな」

「そうね。おじい様が言い出さなかったら、わたしは勝手に帰るつもりでいたことだしね」

「はっはっはっ、その辺の強さも気に入ってるんだが。まあ、今夜はちゃんと車で送るから安心せい」

豪快に笑った後、来栖川老人はそれだけ言って、豪華な食堂から出て行くとする。

セリオとしては車で送ってもらわなくともよかったのだが、車で送ると言う申し出の裏には、少しでも来栖川老人が自分と一緒にいたいと言う思いがあることも分かっていた。

「やれやれ：困ったおじい様ねえ」

小さくそれだけつぶやくと、セリオは来栖川老人の後を追って、食堂から出て行った。

来栖川老人はそのまま一度自分の書斎に行き、そこでインターホンに向かって短く告げた。

「出掛ける。車の支度を」

その言い方は先ほどまでのセリオに対するものとはまったく異なり、厳しさを冷たさすらも感じられるほどだ。だが、インターホンから手を離して、

「すぐに呼びに来るじゃろうから、お前さんもちよつと待っていてくれよ」

とセリオに向かって喋る口調は優しいものだった。

その同じ頃。

豪華な装飾品に飾られた部屋の中で、そこには場違いな雰囲気の方が声が上げた。

「じじいが出掛ける。こんな時刻に出掛ける予定はないはずだから、完全に予定外の行動だな」

それを聞いて、別の男が言う。

「他の連中は？」

また別の男が答える。

「例の執事は孫娘といっしょに外国だ。何でも買い物に行ったらしいな。それともう一人

の格闘娘は鍛練とかで、しばらくはいない。どっちにしてもあのじじいのところにはあまり顔を出不さないらしいがな」

「好都合だな。で、どうだい？ 今夜で構わないのか、あんたは」

「構いませんよ、それでは今夜これからと言うことで」

「ああ、分かった」

「それじゃ、まずは運転手を…」

「ああ」

その声とともに、その部屋から三人の男が出ていき、一人だけがその場に残される。その男はそつと手を口元に寄せ、かすかに笑みを浮かべた。冷ややかな笑みを。

しばらくの後、来栖川老人とセリオは玄関にいた。もちろん浩之の自宅に帰るからで、その場で車を待っているのだ。

「いつになく遅いな」

来栖川老人が足踏みしながら、そうもらず。それを見てセリオは何も言わずに、かすかに笑うだけだった。と言うのも、来栖川老人が玄関で待ち始めてからまだほんの二十秒しかたっていない。時間に対する厳格さゆえか、セリオのことを気にしているからなのか、そんな風な仕種を見せる来栖川老人の姿にどこか微笑ましいものを感じたのだろう。

「お、やっと来たか」

玄関で待ち始めてから三十秒ほどたった頃に、ようやく車がやってきた。だが、運転席から降りてきたのはいつもの運転手とは違っていた。

「見ない顔じゃな？」

来栖川老人が怪訝そうに尋ねると、その運転手は一礼しながら答えた。

「はい、待機室にいなかったものですから、捜したのですが見当たらなかったの、私が代りに参りました」

「そうか。まあ、急な用事だったからな…」

「行き先はどちらになりますか？」

「ああ、それはセリオに案内させよう。なあ、セリオ」

「はい」

ここで来栖川老人に返事をするセリオには、表情と言うものがなかった。つまり運転手が違うので、猫かぶりモードに入っていたのである。

そのことを見越していたのか、来栖川老人もその返事をよしとして、二人は車に乗り込んだ。

「それでは参ります」

運転手はそれだけ喋ると、車が動き出した。その後はセリオの道案内の言葉だけが車内に響く。

「この百五十メートル先の三叉路を右に曲がってください」

来栖川老人も何も言わずに、ただ前を見ながらやたらと細かい道案内をするセリオの姿を見つめているだけだった。

そして、事件は突然起こる。

「こちらではありません。先ほどの交差点は直進して頂きたかったのですが。もし、道を誤ったのであれば、この百九十メートル先の交差点を左折頂ければ結構です」

セリオの道案内を無視して、車が進路を変えたのだ。その間違いを指摘して修正コースまでを正確に指示するセリオをさらに無視して、車はなおも勝手に進む。

「こちらではありません」

繰り返しセリオが告げてる間、来栖川老人はなおも黙っていた。これが単なる方向音痴の成せる技ではないことを分かっていたのだ。恐らくはセリオもそのことを察知していたろうが、猫かぶりモードである以上は表面にそれが出ることはない。

そして、車はある場所で止まった。信号でも何でもない。ただ、そこには男の姿があった。

車が止まると同時に、左右両方のドアから男が一人ずつ乗り込んできた。そして、またすぐに車が動き出した。

「誘拐か？ このような老いぼれをさらっても、何の得にもならんぞ」

来栖川老人が低く告げる。これだけで圧倒される輩も多いのだが、乱入してきた男たちはそれでひるむことはなかった。

「大した奴らじゃな、このわしに正面きって向かうとはな」

感心したような口調で言う来栖川老人だったが、それは乱入した二人も、運転手としてここまで運んできた男も、誰一人として顔を隠すことなく、しかも手口が堂々としているからだ。

「今さらあなたに臆することはないさ。どうせあなたは警察に言うことも出来はしないのだからな」

「そうだな。それこそ身内の恥さらしだからな」

「やはりな……。これだけ堂々とやってのけるほどの奴はそうそうおるまい」

呆れ返った様子を見せながらも、一向に驚く気配を見せない来栖川老人に向かって、老人の側に陣取った男が吐き捨てるように言う。

「堪えないじじいだな。ところで、そっちのロボットはあんたのかい？」

「関係ないじゃろ」

白を切る来栖川老人。だが、男の追求は続く。

「そう言えば、そのタイプを持つて言つてたな。どれ、後が面倒だからちよっと処置しておくか」

「処置じゃと？」

そこで初めて表情を変えた来栖川老人だったが、それは男の楽しみを増やすだけだった。

「おや？ こんなロボットがお気に入りかい？ それじゃ、ここは派手にやるとするか」

男はそう言った後、セリオの側にいるもう一人に短く告げる。

「そいつのセンサー…耳の部分を途中の接合部からへし折れ」

「ああ、分かった。でも、どうして途中なんだ？ 取っつまえばいいだろ？」

「そのタイプは外部センサーと内部センサー両方を持っていて、外部が壊れても切り替わるだけだ。だが、外部が中途半端な状態で残つてると、切り替わらないのさ」

「やめてください」

二人の会話に挟まれるようにセリオが喋るが、それは二人の耳には届いていない。

「なるほど…」

セリオの側の男の両手がセリオのセンサーに掛かる。それを見ながら、指示した男がさ

らに言う。

「何と言っても、クルスガワ自慢のHM13型だ。下手にセンサーなんかを残しておく、こっちの位置も状態も筒抜けだからな」

「そりゃあ物騒だな」

セリオのセンサーに手を掛けた男は相づちを打ちながら、力を込める。いくら頑丈な作りと言っても、接合部の強度は完璧ではない。やがて“バキッ”と言う音とともに、セリオのセンサーは上半分がなくなっていた。

「セリオ！」

来栖川老人が声を上げると、セリオは機械的な口調で答える。

「大丈夫です。外部センサー状態不明、センサー部のチェックを行います」

「これって勝手に替えられないのか？」

センサーをへし折った男が、もう一人に尋ねる。

「ああ、外部センサーの状態がいつまでたっても不明になってるが、センサーシステムそのものが死んでるわけじゃないからな。それと、もう一つやっておかないとな」

そう言う男は、ポケットから細いマイナスのドライバーを取り出した。

「今度は何をやる気だ？」

来栖川老人が威圧しようと声を低くして男に言うが、それも意に介さずに

「そいつのカメラとその奥にある画像の一時記憶装置を壊さないとね」
と言っただけのける。

「何じゃと？」

驚愕の表情を見せる来栖川老人の前に出て、男はそのままセリオの顔の高さにドライバーを持って行く。

「いいねえ、あなたのそんな表情が見れるとは思わなかったよ、ホントに！」

言い終わると同時に、持っていたドライバーをセリオの目に突立てた。

「もう一つ！」

「セリオ！」

男の声と来栖川老人の声が交錯する。だが、ドライバーは確実にセリオの目に突立った。そして、男がドライバーを抜くと、セリオの閉じた目から、液体が流れ出した。

「おい、泣いてるぜ？」

先ほどセンサーを壊した男がわずかに驚きの表情を見せた。だが、目を潰した男は、「レンズクリーニング液のタンクが壊れただけだ。涙なんかロボットが流すわけないさ」と言っただけだ。

だが、来栖川老人がそれはクリーニング液でないことを知っていた。それは間違いなくセリオの涙だったのだ。ただ、ある意味では男の言う通りに壊れて出てきただけなのかも知れない。しかし、その時セリオは何も声を上げなかった。まるで自分にされてる理不尽なことに耐えているかのように。

「それで、どうする？ このロボット」

「じじいの世話をさせりゃいい。その用が済んだら、廃棄処分にするだけだ」

「お前ら…」

来栖川老人は珍しく怒りをそのまま出していた。だが、不意に老人の固く握った拳に、

セリオの手が重なった。

両目を閉じ、センサーを半ばで折られたセリオの姿は痛々しさを感じるものだったが、その時来栖川老人はセリオの気持ちを感じた。何故なら、セリオは重ねた手を、来栖川老人よりも固くぎゅっと握りしめたのである。

（セリオ…。そうか、お前さんもくやしいか…。だが、今はおとなしくするしかないんじゃないな？）

そっと口の中でそうつぶやいて、来栖川老人は再びセリオを見つめる。そのセリオの顔はずっとまっすぐを向いたままだった。そして、その先には漆黒の世界があるだけだった。

（続く）

『おねーさんの耳はロボの耳』完結編第四話

初版:1997/11/08

第二版 (PDF化) :1998/07/28

(PDF書式変更) :1999/11/08

PDF書式変更:2016/05/09